

立原正秋全集

第十六卷

角川書店

立原正秋全集 第十六卷

昭和五十八年八月十二日初版発行

著 者 立原正秋

発行者 角川春樹

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七一一（大代表）

振替東京三一―九五二〇八 ㊦二〇二

Printed in Japan 0393-573416-0946(0)



落丁・乱丁本はお取替えいたします

立原正秋全集
第十六卷
目次

恋人たち

.....

五

はましぎ

.....

一五

解題

武田勝彦
四九

恋人たち

第一章

一

土曜日の正午すこし前、中町道太郎は長谷の安ホテルの一室で目をさました。そばでは女がくちをあけて睡っていた。彼は女の寝顔を一瞥してベッドからおおりと、手洗所に行った。すぐ近くで波の音がしていた。

彼は排尿しようとして生殖器に疼痛をおぼえ、右手の親指と人差指でしばってみた。尿道から黄色い膿がでてきた。排尿したら、タイルの硬さが響いてきてとびあがってしまった。

「いまいまい雌犬め！」

彼は舌うちするとやっとの思いで排尿し、部屋に戻った。彼は自分のからだの生理現象を女に話した。

「あなたがなにもきかないから、あたしも話さなかっただけよ」

女はベッドに腹ばいになって煙草をつけながら答えた。

「なるほど、そいつは明答だ。ところで、よほど古いのかい？」

「へ鳥合（しやごう）の衆（しやう）にくるプロ野球の選手を知っているかしら」

「あのゴリラみたいな野郎か」

「あの人となにしてからよ。三か月ほど前かな」

「そいつは光栄だな。今日から俺は奴と兄弟だ。で、それから幾人の男に移した？」

「おぼえていないわ。なんともなかった人もいたわ」

「そいつはおまえより強いやつを背負っていたから、おまえの方がよけい悪くなった。そういうことじゃないか」

「そうかしら。でも、あたし、なんともないのよ」

「俺は帰るよ」

彼は身仕度した。

「お金をすこしくれない？」

「あのゴリラと兄弟になったお礼にか。いいとも」
彼は、前夜ホテル代を支払った残りの金から小銭だけとり、あとは女の枕もとにおいた。彼は前夜、酒場へ烏合の衆で務合多恵を待ったが、約束の時間がすぎても多恵は現れなかった。そのときカウンターの前で尻をふっていた女がいた。彼が女にウイスキーの水割りをいっばい奢ったら、女はついてきたのである。

彼は安ホテルをでると、海岸通りでバスを待った。すると稲村ヶ崎の方から、海と白い雲を背景に赤い大型のスポーツ車が疾走してきた。派手な野郎がいるものだな、と彼がみていると、車は彼の前で急停車し、坊主頭に黒いサングラスをかけた男が、乗れよ、と言いながらサングラスをはずした。方眼寺の志馬円道だった。

「借りものか？」

道太郎は扉をまたぎ車のなかに入りながらきいた。

「一週間前にセコハンを買ったのさ。スタートはすごくいんだ」

車が走り出した。道太郎は煙草を二本だしてくわえ火をつけると、一本を円道にやった。

「黒いストッキングをはいた女の子をやったことがあるかい？」

円道がきいた。

「ないね」

「そりゃ不幸だな。是非やっつけてみる。しごくぐあいいんだ」

「黒いストッキングをはいた女だけがいいという理由はないだろう」

「つまりさ、ストッキングをはかせたまやっつけるのさ。ストッキングだけはかせて立たせてみる。あんな美的感動をよぶ女の姿は、そうざらにはないぜ。それにな、肉色のストッキングなんて、もう時代おくれだな。黒いストッキング、それから紫色、赤いストッキングなんてのもいいな」

「おまえの発見かい」

「もちろん。俺はこれをフランス文学から学んだように思うが」

「で、いま、やっつけた帰りなのかい」

「昨夜、箱根でね」

「ばかやろう。黒いストッキングをはいている女の子といったら、十五、六の女学生じゃないか」

「おいおい、慌てるなよ。相手は踊り子だよ。いま藤沢でおろしてきたところだ。女の家がそこでね。昨夜、横浜で、劇場がはねてから連れだしたら、なにしろ時間がおそかったもので、女は舞台で踊るときにはく黒いストッキングをはいたままできた。奇妙なことに、それがセックスアピールするんだな。車のなかで女がそれをとると言ったから、俺は千円やっつてとらせなかった。月末にくるから、そのとき試してみろよ。ところで乗心地はどうだい？」

「いいね。ついでに二階堂の家庭教師に行く家まで送ってくれ」

「そうしちゃいられんのだ。今日は親父がいねえから、これから、昨日の朝お陀仏した奴の告別式に行ってお経をよまねばならん。もう三十分もおくれている」

円道は若宮大路の曲りかどで道太郎を車からおろした。

道太郎はバスで二階堂に行き、二時間の出張教授を終え、駅前に戻った。それから彼はへ鳥合の衆へにかけた。へ鳥合の衆へはコーヒー店を兼ねた酒場で、燦んだ建物が並んでいる鎌倉駅裏の一角にある。ことし六十歳になる主人の奥沢宗太は、二十五若い妻をもっており、一日中くちに煙草をくわえっ放しにしている無表情な男で、短く刈

った髪には白いものがまじっていた。彼は誰にも愛想がよくなかったが、店は繁盛していた。昼はコーヒをのみにくる客が多く、主人が店におり、夜は酒をのみにくる客のために彼の妻が店にでていた。

道太郎はカウンターの前にかけ、ジンをもらった。目の前では奥沢宗太が不機嫌な表情で煙草をくわえ、ネルの袋でコーヒを漉していた。カウンターの上から黄色い毛なみの猫が主人の手つきをみていた。主人が受皿にコーヒをすこしこぼして猫の前においたら、猫はそれをなめた。

「この猫はコーヒをのむのかい」

道太郎がきく。

「いつから味をおぼえたのか知らんが」

奥沢宗太は不機嫌な声で答える。

「ここでは猫までが退屈しているとみえる」

「なにしろ客種がいいもので」

道太郎はジンを疊ごともらって店のすみのテーブルの前に行った。そこから窓ごしにみえる通りでは、春のおせい午後の陽ざしのなかを人々が群れていた。彼がしばらくしてカウンターの前をみたら、女が一人たっていた。桃色のスエーターに白いスラックスをはいており、カウンターに両脇をつき、ラジオのジャズにあわせて尻を左右にふっていた。それはふっているのかいないのか判らない程度の動きだった。昼頃ホテルで別れた女だった。女に声をかけようとしたとき、入口から従妹の土方典子（ひじかた）がはいってきた。

「あたしにもちようだい。ジンはひさしぶり。いいにおいだわ」
彼女はコップをもってきた。

「景気はどうだね」

「あたし達、一昨日あつたばかりじゃないの。たった二日間で景気が変わるものですか」
「そうだったかね」

「あなた、多恵さんを待っているの？」

「そういうわけではないが。もっともここ一週間ほどあの奥さんに逢っていないのは事実だ」

「かたちのよい尻ね」

典子がカウンターの前で尻をふっている女をみながら言った。

「そうらしいな」

「さそって見たらどう。ただし、あの尻に恋しなきゃだめよ」

「どういう意味だ？」

「あなた、あのひとの顔をみたことがないでしょう」

「なるほど。それなら大丈夫だ。俺は顔に恋したことはいちどもない。ジンの代金を払っておいてくれ」

彼は多恵を待つのをあきらめ、席からたちあがった。

「あたしは〈痺れ薬〉に行ってるわ。あとでくるならきて」

典子もたちあがった。

道太郎は、ゆれている尻に向って歩いた。近づくにつれ、スラックスにびったり包まれた尻のゆれが大きくなった。

彼は右手で女の尻を撫で、女の左側の止まり木に腰かけた。

「あら、あなたなの。こんばんは」

女は彼をみて言った。

「外はまだあかるいよ。昨夜も俺は尻に恋したが、いつもそうやってさそうのかい」

「そうでもないけど、尻をふっているといい気持なの。病気のぐあいはどう？」

「あれ以上悪くはならないさ。きみが好きになったよ。きみの尻に乾杯するか」

彼は、顔より尻の方が器量がよいのはどうしたわけだろう、と考えながら女に言った。

「それはいい考えね。あたしも、あなたが好きになれそうだわ」

「では、たがいに不平はないわけだ」

「そうね」

「ダブルでやろうじゃないか」

そこで彼等はウイスキーをもらった。

しばらくして二人のあいだでホテル行きの話がきまったとき、道太郎は、俺は今夜は文なしだ、と言った。

「全然ないの？」

女がききかえした。

「昼間ホテルできみにやったあれで文なしになったよ。きみ、いくらか持つてるかい？　持っているなら貸してくれたまえ」

「いつ返してくれるの？」

「じきに返すよ」

そして彼は、昼間ホテルで女に支払ったばかりの金を貸してもらい、女と近くの安ホテルにしけこんだ。彼は商売女を自分のアパートにはつれこまなかった。ホテルについたとき、ウイスキーのせいか生殖器の疼痛はいくらか和いていた。彼は女から貸してもらった金を半分だけ再び女に払い、一時間後にはそこからでた。途中彼は、これからへ鳥合の衆へに行くという女と別れ、〈痺れ薬〉にでかけた。

「あたしの名前をおぼえておいてね」

と女が別れぎわに言った。

「尻ふりで結構じゃないか」

「あたしを美佐子とよんでちょうだい」

「ああ、美佐子さん、ではまた逢いましょう。さようなら」

「近いうちに、きっと、お金返してね」

「ああ、返すよ。せいぜい尻をふりな」

《痺れ薬》は海岸通りにあり、朝の五時まで営業していた。近くには同じような店が二軒あった。道太郎がはいって行つたとき、舞台では男が二人でトロンボンをふいていた。舞台のすぐ下の席では典子が不良学生達にとりまかれてビールをのんでいた。道太郎はうしろの空いた席をみつめて坐つた。

「景気はどう？」

と言いながら典子がよつてきた。

「俺達はさっきあつたばかりじゃないか。数時間でそうやたらに景気変わるか」

「あのひと、どうだったの？」

「あの女は、そこら中の男を兄弟にしているよ」

「いいじゃないの。あなた、そんな女が好きじゃないの。今夜どう？」

「兄弟になつてもいいのかい」

「あたし達はじめからきょうだいじゃないの。それ以上の兄弟はないわ」

「よし、それを忘れないでくれ」

「踊らない？」

「いや、俺はビールをのむよ」

彼はボーイにビールを注文し、典子は学生達のいる席に戻つた。

道太郎の父の中町周太郎は、大正の末に学校をでて、父親が経営している製薬会社に勤めた。その時分彼は、銀座のアミューズメントという酒場で、そこに勤めていた笹本澄子と知りあつた。二人のあいだに優しい感情がかよいあい、間もなく一卵性三つ子がうまれた。子供達が三歳になったとき二人は別れた。澄子が小学校しかでない上に、両親がなく、いや、それは譲歩しても、周太郎以前にすでに幾人かの男の庇護を受けている酒場の女給を妻にするなど、中町家としたら考えられないことであつた。そこで周太郎の父は、一年間と期間をきり息子を外国勤めにだした。

ドイツに追われた周太郎はそこで三年くらさねばならなかった。約束の一年がすぎたとき彼は謀^{はか}られたと知ったが、すでにおそかった。澄子からの音信がきれ、送った手紙が舞い戻った。同時に日本から新しく赴任してきた社員が、澄子が他の男の世話を受けている、と伝えてきた。この日から周太郎は、三つ子の写真を額縁にいれて下宿の壁にかけ、あとの二年間を写真を視つめてくらしただけ。

ドイツ支店勤めを終えて日本に戻った彼は、澄子の行方が知れないままに、しかるべき家柄の娘である初子を妻に迎えたが、初子は石女^{いしめ}であつた。初子は容色が秀れていたので中町家の寵愛を受けたが、石女は困る、と言いだしたのは、息子をドイツにやった父親であつた。そこで老人はひそかに三つ子の居所をさがしだした。初子が承知すれば三つ子のうちの一人を周太郎の後継者に迎えようといふのであつた。三つ子八歳の年のことである。そこで親子は慎重にかくし子の事実を初子に打ちあけた。親子は初子の反対を予想していたが、初子は無条件にかくし子を受け入れた。そこにほんのすこしの嫉妬も介在しない事実^{じじつ}に親子はかなり驚き、かつ喜んだ。澄子にあわせたとき初子は手放して喜んだ。なにはともあれ、こうした天真爛漫な女は貴重な存在だと考えた周太郎は、以前にもまして妻を愛するようになった。はなしあいにより、三つ子のうち上の道太郎が後継者にえらばれ、少年は生母と父のあいだを自由に生ききしてよいことになった。これを提案したのは初子であつた。彼女は、なにか珍しいものでもみるように俄にできた息子を眺め、実の子のようにかわいがつた。彼女は弟の倫太郎も欲しがつたが、これは澄子が承知しなかつた。というのは、いちばん下の六太郎が五歳のとき行方不明になり、それはいまだに澄子のかなしみのひとつで、倫太郎まで中町家にとられるのは、澄子にしてみればさらにかなしむことであつた。

少年が中町家にきてから七年目に周太郎の父が亡くなり、それから二年して母が亡くなった。彼等は生前、孫に満足していた。この子は周太郎のようなら息子にはならないだろう、というのが生前の二人の老人の一致した意見であつた。

澄子は、成長する息子を眺め、自分の腹をいためた子が大きな郎の後継者になれるのを素直に喜んだが、息子はまるでそんなことは考えていなかった。彼は、父から、将来なにをやってもよいと言われていたが、大学は途中でやめ、